
コナン～スパイラル

春崎やよい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「ナン～スパイ럴

【Zコード】

N6457E

【作者名】

春崎やよい

【あらすじ】

スパイラルを元にして作ったお話。もしかしたら、あの人も出てくるかも！読めば分かります！楽しんでください！7月27日から、長期期間お休みします！！

最初は此処から

俺は、名探偵の工藤新一。けれど、ある事件がきっかけとなり小学生に逆戻りしてしまい江戸川コナンとして、毛利探偵事務所に居候している。

どうして、小学生になってしまったのかといつと・・・
それは、私が説明するわ。

私の名前は、灰原哀。ある組織の仲間だったわ。前の名は、富野志保。10億強盗殺人事件で殺された富野明美の妹よ。けれど、今は江戸川君と同じように小学生となってしまった。

それは、私が組織で作つたアポトキシン4869と呼ばれる毒薬を作つたのが、原因。

まあ、幼児化になつたのは、副作用。本当は、死んでしまうのだけれど、どういうわけか幼児化してしまつた。

今、私は阿笠博士の家に居候しているわ。

江戸川君と長い付き合いになりそうね。
悪かつたな。

まあ、前振りはこのくらいにしておいて、
本編に行くか。

楽しんで頂戴！！

最初は此処から（後書き）

さあて、いよいよ始まつたコナン～スパイラル～！
この後の行方分かりません。なんとなく、書いているので行く先は
作者の私ですら、分かりませんので！
更新は不定期ですので！そのとこ、宜しくお願ひします！

スパイラル

学校へ行く道、前から車が走ってきた。まさか、それがジンの愛車、ポルシェ364だなんて思いもしなかった。

「今の車見たか？」

「ええ、見ました。珍しい車ですね」

「そうだね」

元太・光彦・歩美がとおり過ぎていった車を見て言った。

コナン・哀も歩美たちに聞こえないくらいの声で話していた。

「今の車・・・」

「ポルシェ364・ジンの愛車」

「どうしてこんなところに・・・？」

「わからねえ。でも、何もないといいけどな」

コナンたちは、学校へ向かって歩き出した。けれど、コナンの思つたことが起きないとはいえたかった。

学校へ到着したコナンたち。校門に生徒が集まっていた。コナンたちは、駆けつけた。

「何があつたのか？」

コナンは、生徒たちの生垣を分け入つて入ってきた。

校庭には、大人くらいの背をした男性が横たわっていた。

コナンは、駆けつけてきた。後から、探偵団が来た。

コナンは、手首に触れて見た。

(生きてない)

「コナンは、すばやく探偵団に指示を出した。

「警察を呼べ。殺人事件だ！」

灰原は、額きすぐさま携帯電話を取り出して、警察に連絡をした。

「歩美・元太・光彦は、みんなを学校から出すな。重要な容疑者だ！」

「分かった！！」

コナンは、遺体の鞄を探つてみた。まずは、身元を調べないと

案の定出てきた。

（名前は、村崎 洋一。年は、36。どうやら、新任の先生だったようだな）

不運だったという事だらう。いきなり、新しい学校に来たと思つたら殺されてしまうんだから。

警察が来る前に出来る限りのことは、すべてやつてしまつた。後は、最後にこの人と会つた人とこの人を知つてゐる人だ。

警察が来たのは、それから数分のこと。

日暮警部と佐藤刑事、高木刑事、白鳥刑事、千葉刑事の五人が到着した。

この学校がコナンたちが通うと学校だとわかるとすぐに駆けつけた。

「コナン君、大丈夫かね？！」

「うん、僕たちは大丈夫。ただ、今日この学校に来る先生がなくなつただけだから」

コナンの眼鏡が曇つたのを、佐藤刑事は見逃さなかつた。

佐藤刑事は、コナンに近寄つた。

「コナン君が気にかけることじやないわ。」

「そういうことじやねえよ。なんでだよ！何でなんだよ！こんなことなら、さつさとあいつらを壊滅させて置けばよかつたんだ！！！」

「！」

今日のコナンは、一際いつもと違つていた。

刑事たちは、コナンの様子がおかしいことに気がついた。歩美たちも目を開けて驚いていた。

「コナン君、どうしたんですか？ いつものコナン君じゃないですよ。

」

光彦がコナンによりながら言つた。元太と歩美もだ。
灰原は、コナンの横で震えて立つていた。
(なんで、組織が此処にきたの？ どうして・・・)
いつもと違う、コナンと哀。落ち着きをなくしていた。
一体、誰が村崎 洋一を殺したのだろうか？ 組織の連中？ はたまた、
顔見知りの犯行か？

続く

これがトマトの収穫だね。（後書き）

出来的る限り更新します。

犯人は誰？その目的とは

朝、あんな事件が起きたから今日は急休学になつた。先生が誰かに殺されたのだから、無理もないといえないが……

コナンは、博士の家に行くことにした。哀とさつきのことド、話がしたかつたから

歩美たちと別れると、二人は揃つて阿笠邸に着た。

「ただいま」

普段より小さく帰宅を届けた。奥から、博士が出てきた。

「哀君、今日は偉く早いの。何かあつたのか？」

哀たちは、リビングに入つてきた。ランドセルをソファの上に置き、哀は台所に向かつた。

「あつたんだよ。まさか、あいつらの仲間が帝丹小学校へ来るなんて思いもしなかつた」

コナンは、自嘲気味に俯いて笑つた。

「そうじやつたのか」

博士は、学校で何があつたのか大体予想は付いた。

「でも、ま。これではつきりした。やつらは、俺たちの正体に感づいていることがな」

コナンは、さつきとは打つて変わつた笑みを浮かべていた。

後は、チェックメイト・追い込むぜ！！待つてろよ、ジン！」

「ダメ！ダメよ、まだそのときじやない！」

哀は、コップに淹れたコーヒーをもつて戻ってきた。それをコナンは、受け取つた。

話を聞いて哀は、抗議した。

行つては、ダメ！まだダメよ！準備整つてないじやない！

哀は、やるせない気持ちでいっぱいだった。

「灰原・・・」

コナンは、灰原を見て呟いた。

「絶対、お前だけは守るから。だから、心配するなー。」

コナンは、哀に二コリと笑つて見せた。

「工藤君。そうね、絶対護つて頂戴よー。」

哀もコナンに笑いかけた。それを天から見守る一つの影があつた。

「私も出来る限りのことはしますね」

そして、暗闇の空を飛んでいった。

犯人は誰？その目的とは（後書き）

評価・感想・ダメだしお願いします。

むしものまなし

此処は、月臣学園の新聞部。

パソコンの前で、頭を捻つて考えている女性が座っていた。その後ろには、テレビを見ている男性がいる。

「さて、今回は万能包丁と・・・」

どうやら、通販販売のテレビを見ているようだ。

「鳴海さん、いつも通信販売の番組見てますよね?」

「……そうだな…」

愛想のない顔で言った。それが気に食わなかつたのか、女性はブスツとした顔になつた。

「別にいいですけど……。」

「それにしても、雨やまないですね。」

女性は、外を見て言つた。

今日は、朝からずっと雨が降つていた。鬱陶しき雨

「やうだな。」

鳴海さんと呼ばれた男性は、立ち上がつた。それにつられて、女性も立ち上がつた。

「今日は、このへんにしておきましょ。」

そういつて、パソコンをシャットダウンした。椅子をしまい、新聞部から出た。

玄関に来ると、靴を履き替えた。傘を持って、外に出た。

「これから、一緒に出かけませんか? ちょうど、明日休みですし」

「この雨の中ですか?...?」

鳴海は、面倒くさそうな顔をしていった。けれど、女性は嬉しそうに笑つてゐる。それが、不快になる。

「そうですねけど。いやですか？」

「別にかまわないけど……」

女性・結崎ひよのは、鳴海の顔をうかがつてこいつ提案した。

「そうですねえ。この雨だと、気分めいるので鳴海さんの自宅に行きましょう！」

パアとした笑顔で言った。

鳴海は、いやな顔をした。

「何でそういうなんだよ？」

「鳴海さんの手料理、食べたいです！」ひよのは、嬉しそうに言った。けれど、歩の顔は、不機嫌そうな顔になっていた。

「分かったよ。」

「ありがとうございます、鳴海さん！」

ひよのと歩は、笠を広げて、歩の自宅に向かった。

「ただいま」

帰宅するとリビングから、話し声が聞こえてきた。
誰かいようだ。

歩とひよのは、リビングにやつってきた。椅子に座つて話しているのは、歩の姉、まどかだ。真向かいには、月臣学園の制服を着ている生徒だ。それは、誰かは分からない。

まどかは、歩が帰つてきているのを発見すると「お帰り」と言った。

「ただいま。誰かいいるの？」

「お友達が来ているわよ。竹内理緒さんと浅月香介君、高町亮子さん。それにアイズ・ラザフォードさん、カノン・ヒルベルトさんもいるわ」

涉は、三人の名前を聞いて目を見開いた。視線を理緒と浅月・亮子・ラザフォード・カノンに移した。

「何のようだ？もつ、ブレードチルドレンは終わつただろ？」「殺氣の籠つた声で言つた。

「今回は、別の用件で着たんだ。取り合えず、座つてくれ」

浅月がいつ。それに歩とひよのは、従つた。

むしものはなし（後書き）

久しぶりの投稿になります。

今回、初登場となりました、歩とひよの、そして浅月、洋子、理緒、
アイズ・カノン。一気に出しました。

評価・感想・ダメだしきれると嬉しいです。

「ひかる、ひつなる？」

家に帰ると、浅月たちが鳴海家に訪れていた。
姉・まどかと話をして歩の帰宅を待っていた、浅月・理緒・亮子・
アイズ・カノン。

一体何しにきたのでしょつか？

ひよのは、首を傾げてみていた。そして、隣に座っている歩の横顔を眺めていた。

「……先に言つておく。話の途中に突つ込んでこないよ！」

ひよのは、アイズを見た。

アイズは、そう言つて黙つた。

「暫く前、カノンから聞いた話だ。カノン、頼む」

今度は浅月を見た。

「一体なんなんでしょう？ ひよのは、真正面を向いてみていた。浅月は、カノンに代わるように言つた。

ひよのは、カノンに目を向けた。

「じゃあ、話すよ。絶対に突つ込んでこないでくれたまえ。」

「君たちにお願いがあるんだ。」

「お願ひとは、一体なんなのでしょうか？ しかも、あのカノンからです。信用できる代物なのでしょうか？」

歩は、突つ込みたいのを喉の奥にとどめていた。ひよのは、歩をちらりと盗み見た。

「米花町に一緒にきて欲しいんだ。」

「はい？」

間の抜けた声を一瞬あげそうになつた。

今、カノン、米花町に一緒に着て欲しいだつて？
何が何で、行かなきやならないのか。疑問である。
「どうしてですか？」

歩の変わりにひよのが聞いた。

「推理小説家の工藤優作さんに会いたいから、だよ」
理緒が話してくれた。

そのために一緒にこいだと？笑わせるな
歩がそう簡単に動くはずがない。

ひよのは、歩の横顔をずっと観察しています。

「一緒に来てくれる？鳴海弟」

カノンは、歩の目を見て言った。

鳴海さんは、引き受けてくれるのどうか？

ひよのは、黙つて歩の顔を見ていました。

おひかわ、おひなねるへ。（後書き）

昨日と今日で、更新完了！やつと、話が進んでもらいました。
コナンのところで、止っていたらつまらないですもん！
一気に出しちゃいました！

評価・感想くれると嬉しいです。

此処で、ちゅうとお知らせ！

今日から、人気投票を開催します！

私が今まで書いた小説の中からどのキャラが好きだとかいましたら、
メッセのほうに送りください！
期限は、今月いっぱいまで！…！
どんどん、書いて送ってください！
お願いします！三（—）三

あの事件の日から、一週間が経つた。犯人は、まだ捕まつていなかつた。けれど、一・三日学校を調べたら、次の日からは通常に授業が行われるようになつた。

ただ、先生たちは子供たちに何かあると不安だという事で、送り迎えをするように通告された。大半の大人たちは、自分たちで迎えに行く。けれど、此処阿笠邸では、博士が歩美・元太・光彦・コナンの送り迎えを哀と一緒についていた。親からのお願いだ。

場所が変わつて此処は、米花町一丁目一十一番地。そう、彼の有名な工藤邸の隣の家にある阿笠博士の家だ。

現在、学校帰りに少年探偵団が博士の家に遊びに来ていた。それは、博士が新作のゲームを作つたからという灰原の申し出のもとで着ていた。

もちろん、少年探偵団のメンバーである江戸川コナンも着ていた。灰原は、コナンを見て

「つまらなさそうね」

「当たりめえだろ？ あいつらを呼んだのは、新作をやらせるためであつて、俺はやらなくてすむんだから」

「そうね。じゃあ、あなたには違うことをしてもらおうかしら」

コナンは、顔を引き攣らせた。

灰原は、ソファから立ち上がり地下の研究室に向かつた。そのあとをコナンが追う。歩美・元太・光彦は、二人に気が付いていない。

場所が変わり、鳴海家。現在時刻は、午後7時過ぎ。先づ、吉野と壁へかかって、今日は由まつてもいいつまつ、うなづく。

カノン、アイズ、理緒、浅月、亮子は言われた。

「愚二である。」

「あたしたち、すぐに帰る予定だつたし」

「氣を使わなくていいのですよ」

理総・亮子・ひよのは言われ
それでせまとかは
済まないでいきな
カニヒ言ひた。

説得されたひよのたちは、とうとう折れた。

そのときにはすでに歩は、夕飯の支度を始めていた。

今日は、人数が多い分作る量も半端ない。

リビングで、ひよのを始め亮子・理緒・浅月・アイズ・カノンは、

歩の料理の腕前を見ていた。

まとたは、元レヒターのことを尋ねて、いた。
歩が作った料理が、すでに食卓に並んでいた。

今日の料理は、洋風だった。シンプルにパスタ。ソースは、歩特製の手作りだ。

「姉さん、食べるぞ」

まどかは、コントロールを投げ出し、食卓に着いた。

今日は、随分と賑やかになつた。

「ん～～～！～～やつぱり、鳴海さんの料理は美味しいですね～～！絶

品です。

「そうだね。美味しいよ！」

「 そうだねえ。 美味いよ 」

「確かに。まづくわねえ」

「うん、凄くおいしいねー！」

111

それぞれの賛辞を貰つた。アイズが黙つて食べてくれたのは、何も
いう事ないということだ。
そして、夜は更けていつた。

思ひ心（後書き）

ちまちま更新。今日は、とくにやることもないのに、この小説を更新させよつと 思います。多分、時間が大幅に掛かりますが、楽しんで読んで下さい！ 終わるまで、楽しんでください！ 評価・感想いただけだと嬉しいです。

出会い時は、何かが始まるとき

次の日、歩たちは早速米花町にやつてきた。朝一番早くバスに乗り、電車に乗り次いだりと大変な思いをしてやつとたどり着いた。

「へえ、此処が米花町ですか！」

「そうみたいだね。」

「やつと着いたのか！何時間も掛かつたね」

亮子は、伸びていた。何時間も掛かつたから、体が疲れていた。みんな、背筋を伸ばして疲れ手を取つていた。そんな時、通りの向こうから人が歩いてくるのが見えた。

「今日の夕飯何にしようかな？」

蘭だ。それに歩が気がついた。

向こうにいる蘭も、集団にいる中の一人に気がついた。

「あの・・・どうかしましたか？」

「いえ、何も。人を探しているんだ。工藤優作・・・どこにいるか知つてているか？」

歩が言つた。それを聞いた蘭は・・・

「その人の知り合いでですか？」

「いや・・・・ただのファンです」

蘭は、それを聞いて安心したのか、ホッと胸をなでおろした。

「そうですか。此処じゃなんですから、カフェに入りません？
それのみんなも、同意した。

時は変わつて、一時間前。

此処は、阿笠邸。今日は、朝早くに服部が聞いていた。それだけじゃない、少年探偵団も聞いていた。

なんで、今日に限つて着てているのかといふと。

今度、キャンプしに行くからだ。

それが決まつたのは、三時間前のこと。例の殺人犯が捕まつたという事を聞いたからだ。

「犯人が捕まつたからつて、急にキャンプに行かなくともいいだろう！？よりによつて、何で服部が此処にいるんだよ！？」

「仕方ないでしょ・・・。彼が勝手に着たんだから」

哀は、冷静かつ冷ややかに言つた。それを言われてしまえば、いくらなんでもコナンも反撃は出来ない。

「そうだけど・・・」

コナンは、服部に向き直り今回のキャンプに同伴するのか聞いた。服部は顎に手を当てて、考え始めた。

「そうやな。どうしよか・・・」

暫く考えた末、服部が出した決断とは・・・

「よつしゃ！俺も行くで
だつた。

なんだよ、来るのかと頭を抱えたくなるコナンだった。

哀は、時計を見た。

もう、五時だ。そろそろ、歩美たちを帰らせなくてはならない時間。

「吉田さん、円谷くん、小嶋くん。そろそろ帰りなさい。」
呼ばれた三人は、時計に目を向けた。すると、五時になろうとしていた。

「そうですね。帰りましょう」

光彦が率先して、帰宅に着いた。

出番の時は、何がが始まるのか（後書き）

時間がかかってしまいました。よつやく、コナンキャラとスパイラルキャラが出会いました。此処まで、大変でした。評価・感想楽しみにしています。宜しくお願いします！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6457e/>

コナン～スパイラル

2010年10月13日19時07分発行